

賀川豊彦 復興へ決意

関東大震災直後の詩発見

神戸で労働運動や生活協同組合運動などを展開し、日本の社会運動家の草分けとして知られる賀川豊彦（1888〜1960）年が、関東大震災の復興支援に当たる決意を表明した詩の掛け軸が、27日までに見つかった。

賀川豊彦記念・松沢資料館（東京都世田谷区、加山久夫館長が確認した。全集などにも収録されておらず、賀川の受けた衝撃と、救援への使命感を物語る貴重な資料だ。

神戸で使用の落款



賀川豊彦 社会運動家、キリスト教伝道者。神戸市兵庫区生まれ。旧制徳島中、明治学院、米プリンストン大などで学ぶ。神戸市新川のスラムで暮らしながら、伝道や貧困救援活動に従

事。その体験などを元にした自伝的小説「死線を越えて」は3部作で計400万部のベストセラーに。関東大震災後、活動の中心を東京に移した。労働争議、農民組合の結成平和運動などに尽力。「コープこうべ」の前身の設立にもかかわった。その名は特に欧米で知られ、ノーベル文学賞・平和賞の候補にもなった。

んだ、そして私等は甦らされた、誠におまへの途は尊い途で有った 私はおまへのために六千度の太陽の熱を受ける」という詩に、「一九二三年九月 賀川豊彦」の日付と署名がある。

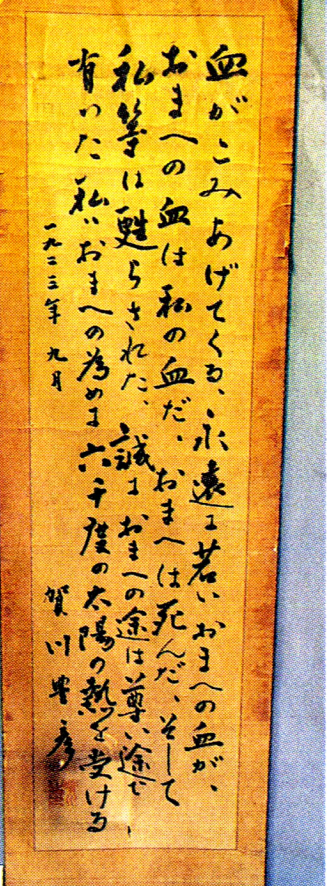
同館によると、3月に古書店から購入し調べていた。押された落款は賀川が当時、活動拠点だった神戸で使っていた印であることが分かった。賀川の揮毫は勢いのある崩し字が多いが、この書で

は楷書体。目の病気がかかってきた賀川が、ていねいに書いたか、妻のハルなど身近な人が代筆したと同館は見ている。

詩の「おまへ」は、目上の人を呼ぶ尊敬表現で、牧師の賀川がキリストによる罪のあがないと復活に重ねて、東京や日本を指したとみられる。

賀川は23（大正12）年9月1日に起きた関東大震災の翌日、材木などを船に積み神戸を出港。上陸した横浜から徒歩で東京に入り、被災状況やニーズを調べ数日後、神戸に戻った。その後、約1カ月間、西日本各地で義

援金を集めるため講演。10月から東京・本所で、炊き出し、布団や衣服の配給などを始めた。失明の危機を何度も乗り越え、被災者の自立支援のために立ち上げた事業が現在、信用組合、病院、社会福祉法人などに発展している。掛け軸は10月31日まで、同館の特別展で展示されている。



発見された、賀川豊彦が関東大震災の惨状を見て救援の意思を表明した詩の掛け軸

援金を集めるため講演。10月から東京・本所で、炊き出し、布団や衣服の配給などを始めた。失明の危機を何度も乗り越え、被災者の自立支援のために立ち上げた事業が現在、信用組合、病院、社会福祉法人などに発展している。掛け軸は10月31日まで、同館の特別展で展示されている。

血がこみあげてくる、永遠に若いおまへの血が、おまへの血は私の血だ、おまへは死んだ、そして私等は甦らされた、誠におまへの途は尊い途で有った、私がおまへのために六千度の太陽の熱を受け

一九二三年 九月

賀川豊彦